
◆ 巻 頭 言 ◆

新しい生活様式にも対応したかわりを

公益社団法人宮城県精神保健福祉協会

会長 高階 憲之

(特定医療法人松涛会南浜中央病院 理事長)

東日本大震災から10年を迎えようとしています。被災地域においては、昨日のことのよう思い出す事も多く、悲しみを新たにすることも多いと思います。2011年以降も自然災害は続いています。2014年8月の豪雨による広島土砂災害、同年9月の御嶽山噴火、2016年4月の熊本地震、同年8月の台風等による北海道の豪雨被害、2017年7月九州北部豪雨、2018年6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨、8月の九州北部豪雨、9月の北海道胆振東部地震です。これまで比較的降雨の少なかった北海道・東北でも豪雨が発生するようになりました。宮城県内でも、1986年（昭和61年）台風10号による8月5日洪水、そして2015年9月関東・東北豪雨が発生し、2019年台風19号による洪水は記憶に新しいところです。また、2019年にも7月豪雨や台風10号による災害が発生しています。では、自然災害の発生数は増えているのでしょうか。気象庁は災害をもたらした気象事例（地震や火山による災害は含まない）を発表していますが、1990年から2019年までの30年間の平均件数は年3.7件です。それに対して最近10年間の平均件数は3.4件と、件数が増加しているわけではありません。しかし、地震や火山災害が発生した場合に作成される災害時自然現象報告書では、2005年から2019年までの15年間での平均報告書数は3.1件に対して、2013年から2019年までの7年間のうち4年間（2013年6件、2014年4件、2016年5件、2018年5件）で平均数を超えて発生しています。国交省の資料によると、この30年間で、時間雨量50mmを上回る大雨の発生件数は約1.3倍、時間雨量80mmは約1.7倍、時間雨量100mmは約1.6倍に増加しています。地球温暖化による影響と見られ、今後、更に温暖化が進むことから、台風や高潮といった自然災害の激化が心配されます。

かつて十年一昔と言われてきました。最近では多くの人が一昔は5年と答えるようになり、中には1年と答える人もいます。この様に社会の変化が一段と加速する中で、災害の増加が追い打ちを掛けて、特に被災者以外の震災の記憶も一段と風化してしまうのでしょうか。

2019年末から始まった新型コロナウイルスの流行は、2020年の夏になっても収束せず、今後鎮静化するかさらに蔓延するかは分からない状況が続いています。新型コロナウイルスへの感染の心配以外に、経済に与える影響も大きく、雇用情勢の悪化や景気の悪化の他に、東京オリンピックの延期といったスポーツや文化活動の制限、外出の自粛や三密を避けての会合の中止など、生活への影響も大きくなっています。感染を防ぐため人との接触を避ける逆隔離のため高齢者が外出できなくなり、身体活動の低下が進むほか、せっかく培われてきた地域の絆も危うくなりました。

景気回復は、IT分野や人との接触を避けることができる技術の分野などwithコロナに対応できる産業が成長し、人との接触が必要な飲食や宿泊などのサービス産業が衰退するK字型回復を示しています。東日本大震災以降の地域住民の中での拡大してきた鋏状格差に、このK字型回復が悪影響を与えることを防ぐことも必要です。3月以降に新型コロナウイルス感染症が本格的な流行となって以降は、withコロナといわれる新しい生活様式が求められるようになりました。人との触れ合い方を否応なく変えざるを得ない今、心のケアも新しいケアが求められていると思います。生活様式の多様化に加えて、withコロナの時代に、今まで以上に多様化する心のケア活動を発展させ持続させる必要があると思います。
